



学校だより

1月号

令和4年1月11日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「^{よん}四^{くん}訓」

学校長 後藤 直樹

穏やかな天候が続いた年末年始でしたが、コロナの感染者が増加傾向の中、令和4年がスタートしました。一日でも早く日常を取り戻したいということは、全世界すべての人々の願いであるに違いありません。

年頭の抱負に代えて「子育て四訓」というものをご紹介します。これは山口県の教育者、緒方先生の言葉ということですが、保護者の皆様の中には、どこかで目にした方もあるかもしれません。短い言葉の中に幼児期の愛着形成の時期から、自立に向けた青年期までのポイントが的確に表現されているのに感心させられます。

- 1 乳児はしっかり 肌を離すな
- 2 幼児は肌を離せ 手を離すな
- 3 少年は手を離せ 目を離すな
- 4 青年は目を離せ 心を離すな



ここには「子育て」とありますが、学校の教育活動の中にもびたりと当てはまる内容だと考えています。小学校の6年間はちょうど、3番目の少年期「手を離せ 目を離すな」あたりかと思えます。もちろん個人差はありますが、新入学当初の手取り足取りの段階から、1段ずつ学年の階段を登りながら、自分の力で解決していく力を育てていくというイメージです。手を離すタイミングを計りながら、少しだけ離れた場所から導き、温かく見守る。また、「目を離すな」というところが大切で、単に「見張っている！」という意味ではなく、自分の力でやり遂げたことを周囲が認め、褒めるということです。そこで得られた成就感や達成感はその次のステップへの意欲へとつながります。今年も相武山小学校の教職員一同、このような姿勢で子どもたちの成長に携わっていただければと思います。引き続き皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

私は、特に4番目の「青年は目を離せ 心を離すな」という言葉に共感を覚えます。新卒として教職に就いた当初の10年は中学校に勤務していました。反抗期の真ただ中の子どもたちを前にして、その気持ちを掴むことが何より大切であることに気付いたのは、数年後のことでした。教科学習に限らず、生活指導や学級集団づくりも全てが、この信頼関係が核となり成立していくということです。それは正に「心を離すな」そのものでした。